

透明なものが色づくこと

—少年院で大人になることへの現象学的アプローチ—

From transparency to color

— A phenomenologically based approach to the schooling of adolescents in a reformatory —

小澤 豊
Yutaka OZAWA

目次

- 1 関心の所在
- 2 研究対象
- 3 研究倫理及び方法
- 4 今までの自分
- 5 20歳になる自分
- 6 これからの自分
- 7 総括

1 関心の所在

非行のあった少年は、保護処分として送致された少年院での生活をどのような思いで過ごしながらか更生へと踏み出し、そして大人になっていくのだろうか。

本研究が目的とするのは、「非行少年」と言われる彼らの、「非行」に着目した場合での立ち直りの過程と、そして「少年」に着目した場合での、20歳の誕生日を迎え大人への移行する過程とが、彼ら自身においてどのように関連付けられているのかを具体的に描き出すことである。

近年、公職選挙法が改正され、選挙権年齢が20歳から18歳へと引き下げられ、また、民法も改正され、成年年齢も18歳まで引き下げられた。こうした動きの中で、少年法の適用範囲とする「少年」の上限年齢についても従前の20歳未満からどこまで引き下げることが法制審議会において議論されている（平成31年1月現在）。

犯罪や非行に対する我が国の現行法制度では、基本的には刑法や刑事訴訟法で定める司法手続が執られるが、本人が20歳未満であれば、刑事手続の中で特別法である「少年法」に基づく手続が優先される。そして、審判に付された非行少年のうち特に教育や社会復帰支援が必要である者については、矯正施設である少年院に送致される仕組みとなっている。

少年法における「少年」の適用範囲については、刑事処分可能年齢の引下げ（16歳以上から14歳以上

へ）や少年院送致可能年齢の引下げ（14歳以上からおおむね12歳以上へ）といったように、過去に部分的に変更されてきた経緯があるが、これまでの変更と今回の議論との大きな違いは、適用する年齢の上限それ自体が議論されているところにある。上述した公職選挙法及び民法改正に続くこの議論は、少年非行の深刻化に対処するための処置といったレベルでの議論に留まるものではなく、まさに「成長過程にある若年者をいかに取り扱うべきか」という大きな問題¹⁾として取り扱われており、今後の議論が注目されている。

このように、「少年」の適用範囲が議論される今日状況において本研究の目的を設定した背景には、改めて、当事者である非行少年が現行の取扱いをどのように意味づけているのかに身を置いた考察が必要であるとする実務家としての筆者の思いがある。

なお、本論文はあくまで筆者の私論であり、少年院を所管する法務省矯正局の見解によるものではないことをお断りしておく。

2 研究対象

筆者が本研究に着手した背景には、少年院において低調な生活にあった少年がある日を境に前向きになるのを目の当たりにしてきた実務家としての経験がある。

低調さの原因には、少年院に送致されたことその

ものへの不安や不満、また、自身がしてしまった非行への後悔が大きいのが通例だが、そうしたこれまでの出来事に加えて、社会復帰後の就学・就業先について見通しが全く立っていない場合には問題は一層根深いものとなる。

一方、そうした状況にあっても多くの少年が落ち着きのある生活に移行していく背景には、少年院での生活に次第に慣れ、そこで行われる教育や社会復帰支援を通じて指導職員との心的交流を深め、非行をしてきたこれまでの自分を振り返り、また、更生に向けた社会生活を送るための準備期間として少年院生活を位置付けることができるようになることが挙げられる。また、他の少年らとの集団生活を通じて適切な距離を保ちつつ自分自身の感情や意見を表現することができるようになっていくことが大きいとの調査結果もある²⁾。

少年と大人の、いわば端境期にある者を対象とした当事者研究を行うに当たっては、できる限り20歳に近い者であること、そして大人に近い年齢であるからこそその課題を抱え、悩みながらもその課題を解決しようとしている者を対象とした。

本研究の対象としたP君(仮名)は、19歳半年頃に、家庭裁断所での審判を初めて受け、少年院送致決定を受けた男子少年である。非行事実のほか、家庭環境、社会生活上の課題等を考慮され、P君は収容期間をおおむね20週間とする、短期間の教育課程を有するある地方の少年院に送致された。その結果、偶然なことだが、P君は少年院を出院する時期と、20歳を迎える誕生日がほぼ一致することになったのである。

入院してからのP君は、その体格、風貌からして明らかに大人の雰囲気醸し出していたが、当時10代半ばを中心とする他の少年らとの集団生活にはなかなか感じることも多い様子でもあった。

そんなある日、P君は日記にこう記した。

最近学歴というものが欲しくて、今までの自分と葛藤している自分がいました。でも今日の面会で自然と答えが決まったような気がしました。仕事を今までどおり頑張ると言う方でした。(中略)多分、自分が今から学歴が欲しいと言ったり、何かしたいことを探すためにこれをしたと言えば、親は迷わず力を貸してくれると思います。

だからこそ、自分は自立したいと思いました。自分が来年で成人になるというのも大きな理由です。(中略)技術を学ぶだけでなく、その技術を使用する資格や経営、法律について学びたいと思いました。学歴に匹敵するくらいの自信を身に付けたいです。

(個人の特定を避けるため、文意を損なうことがない程度に表現を変えた。)

少年院を出院した後の仕事や生活について、保護者と面会の場でじっくりと話すことができた、そんな日の夜に書いた日記の中で、P君は将来設計を決めるまでに、いわゆる学歴コンプレックスを抱えてきたことを明かし、また、決断までの過程には20歳を迎えることが大きな要因にあったことを、筆者を含めて少年院の職員に伝えてくれた。

日記を通じての彼の告白に触れ、非行のあった少年らが大人になっていく変容過程の本質的なものを感じた筆者は、当の本人から聴くべく本研究に着手したのである。

3 研究倫理及び方法

(1) 研究倫理

P君とその保護者に対し、少年院での生活を通じて思い出深かった出来事や成長のきっかけとなった出来事を聞き取ることを目的として研究の趣旨を伝えて同意を求め、両名から書面で承諾を得た上で、部内での研究倫理基準に合致していることを確認した後、本研究に着手した。

(2) 研究方法

少年院入院後12週目、16週目そして出院の1週間前に当たる19週目にP君に対してそれぞれ20分から40分時間程度のインタビューを計3回行った。

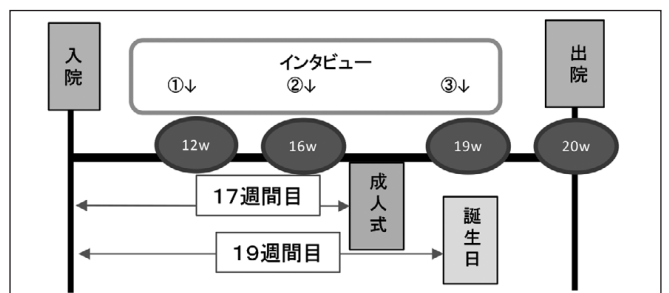


図1 インタビュー・スケジュール

インタビュー内容はすべて録音し後日トランスクリプトにし、現象学的アプローチにより分析した。分析に当たっては、マックス・ヴァン＝マーネンの提唱する、解釈学的現象学的研究に関する6つの基本³⁾を中心に据えた。

現象学的アプローチを採用した理由は2つある。

1つ目には、対象者(本研究では「20歳を間近に迎えた少年院在院者であるP君」)に固有の生きられた経験を記述し、理解することをねらいとしていることであり、そして2つ目には、その経験の理解に当たっては時間の流れや少年院という独特な空間についての全体的な把握が必要であり、現象学的アプローチがそのために適切な方法であるためである。

トランスクリプトからの引用部分の末尾に〈3〉といったように示した数字は原稿のページ番号を指し、1回目のインタビューは〈①3〉(「1回目のインタビューの3ページ目」であることを指す)、2回目のインタビューは〈②10〉のように表記した。

なお、1回目分のトランスクリプトは全5ページ、2回目は25ページ、そして3回目は10ページであった。

4 今までの自分

(1) 職場に戻る

筆者がP君に初めてインタビューを行った12週目は教育計画の中盤に差し掛かった頃であり、また、P君に関する出来事に注目した場合には、保護者との面会の数日後、元の職場の上司宛てに復職を願い出る手紙を出し、それを承諾する来信が届いたという出来事があった直後であった。インタビューは、その手紙についての話題から始まる。

以下、筆者の発言部分を「小」、P君の発言部分を「P」と示す。

小：仕事については、前の職場に戻る…。

P：とりあえず、はあ。

小：戻してもらえる感じなの。

P：はい。あのう、返信が来まして。

小：仕事って、どういうことをしているの？

P：一応、薦っていう仕事なんですけど。足場とかマンションの工事とか。

小：もう勘弁、ではなくて、もう1回仕事をさせてほしいという…。

P：はい。

小：それって、仕事の内容？それとも一緒に誰かと仕事ができること？どういった感じのことが君を引き付けるのかな。

P：(間があって)あ、自分がつてことですか？

小：そうそう。

P：仕事ですね。

〈①1〉

少年院での生活を励まし、また、共に仕事することを心待ちにしているとの元職場の上司からの返事は、P君にとって喜ばしい情報であったはずである。だが、インタビューの中でそのことを「前の職場」や「戻してもらおう」といった言い回しを用いて問いかけた筆者に対し、P君は「とりあえず」、「あのう」、「自分がつてことですか?」といったように、どこか腑に落ちていないような応じ方をしている。特に「自分がつてことですか?」に至っては、1対1でのインタビュー場面としてはかなり違和感のある応じ方であろう。ちぐはぐなやりとりは他の部分にも見られる。

小：職場に戻るってというか、職場に戻してもらえるって感じだよな。同じような質問になってしまうかもしれないけれど、どこに喜びを感じるの？

P：戻してもらおうことに対してですか？

小：まあ、もう1回職場に戻れて。嬉しかったと思うんだ、手紙が来た時に。

P：そうですね。まず第一には、今の職場には3年くらい通っているんで、基本、好きに仕事をさせてくれるんですよ。〈①3〉

元の職場に復職することを筆者は「職場に戻る」と表現し、職場に戻ることにの嬉しさを聞き出すべく質問したのだが、P君はこれに応じずに、自身が過去にどれだけ仕事を任せてもらっていたかを説明しており、両者に微妙な食い違いが生じている。

この部分だけでは憶測の域を出ないが、このインタビューから1か月ほどが経過した、入院から16週目に当たる2回目のインタビュー中、今度は「元の職場に戻る」ことを「再就職」に言い換えた上で再び話題にした筆者に対して、P君は次のように応じる。

小：同じことをやっても「戻る」だったり「再び」だったり、意味が違うみたいなの。
 P：むしろ相手は同じかもしれないけれど、自分は違うのかもしれないね。
 小：感じが変わっているかもしれないよね。
 P：でも、戻っていないにしても今までのも大事にしたいです。自分の中にたまってきたものだと思うんで。それを切り捨ててしまえば、新しい方に行くにしても、スタートする位置が違うと思うんですよ。 〈②17〉

ここには遠慮がちではあるが、しかし「戻る」という言い回しをはっきりと自分から遠ざけようとしているP君の思いが表れている。

少年院で自分を見つめ直し、これからの自分の在り方を一から考えていく立場にあるP君と、元の職場で雇用されることを一般的な意味で「元の職場に戻る」と表現した職員（＝大人）の立場にある筆者との間のずれが際立つ箇所である。

今のP君にとって「今までの自分」とは、「今の自分」とは明確に区分けされているが、過去（過ぎ去ってしまったもの）というよりは、今の自分に沈殿し今の自分の一部を意味づけているようである。さらにそれはこれから先に「新しい方」へと向かうことになる「今の自分」の枠組のようなものとなっているようである。

（2）恥ずかしさを受け入れる

インタビューを通じて、P君は少年院での生活を時間と場所それぞれで説明する際、独特な2つのフレーズを用いていた。

それは、仕事が決まるまでの時期を「悩んでいた時期」、以降を「新しい方」と語っていたこと、そして場所についてはP君が一度も「少年院」とは語らず、代えて「こういうところ」、「ここ」、「こんなところ」と語り続けていたことである。彼が一度も「少年院」という表現を用いなかったことについては、次章で詳述することとし、ここでは時間軸に当たる「悩んでいた時期」について検討する。

小：前に日記で「学歴が中卒」だって…。
 P：あ、はい。悩んでいた時期です…。
 小：自分でも心当たりがあったんだね。

P：普段社会にいて仕事をしていると、内心想っていても考えるようなことはしなかったと思うんですよ。「俺はこれでいいんだな。」「このまんまで俺はいいや」みたいな感じで。でも、こういうところに入ると、社会にいる時よりも考える時間は増えますし、自分で言うのも何ですけど、質もちょっとは上がっていると思うんです。その中で、その、見て見ぬふりしてきた、その、自分の学歴を気にしているところなのかなって。

小：気にはなっていたんだよ。

P：その時期は、やっぱり悩みましたね。内心、やっぱり「中卒恥ずかしい。」って思う自分がいたんだなって。

小：あ、「ちゃんといたんだな」って。

P：はい。やっぱりどっかにいたんだなって。

〈①4〉

「新しい方」へ移行したと語るP君は、少年院での生活を送る中で、社会で日常生活を送る中では深く考えずに済ませてきた「学歴が中卒であること」に向き合い、恥ずかしく感じた時期があったのだという。

少年院はプライバシーが守られる空間であって、本人が話すことがなければ他の少年に学歴を知られることはなく、中卒であることを周囲に知られるという意味での恥ずかしさはない⁴⁾。

ここでP君が語るのは、誰かに知られたことや知られているのではないかとの気恥ずかしさではなく、社会で生活していた頃には気にしないこととしてきた「学歴を気にする自分」を再発見した結果、内面に生じた思いである。その思いは少年院での生活を通じて培ってきた向上心がもたらした、いわば副産物のような感情であるが、その一方で20歳を間近にしたP君にとってはすぐにどうこうできるものでもないこととして感じられているようである。

こうした「内面に封じ込めてきた自分」は、自身の非行について語る他の部分でも登場する。P君は、少年院に送致されることになった本件非行を振り返る別の箇所でも、「(事件当時)『こんなことをしちゃだめだ』って自分はいたんですよ。(③7)」とも語っている。社会から切り離され、初めて少年院で過ごす時間の中で、P君は「学歴を恥ず

かしく思う自分」や「非行を止めようとしてくれた自分」が今の自分の内にいたことに改めて気づいたことが「新しい方」への移行には大きかったと語っている。

P君という非行少年の語りを通じて、少年院での生活そのものが、自己理解や非行の振返りに少なからず影響していたことが窺われる。

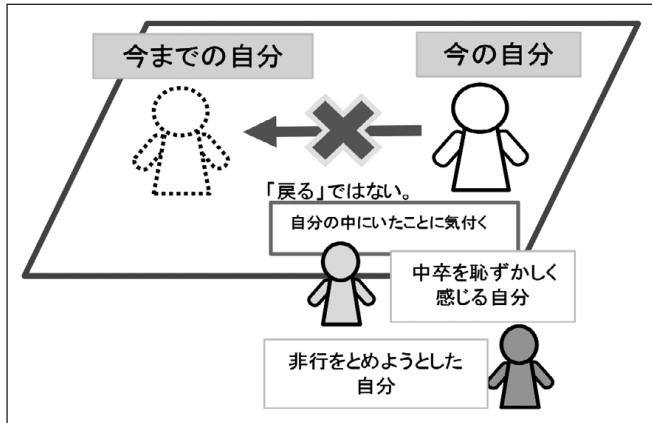


図2 「今までの自分」との関係

5 20歳になる自分

(1) 成人式を断る

学歴を恥ずかしく感じる自分がいたことに改めて気づき、それを大切にしながら、P君は悩んでいた時期から新しい方へと歩みを進めていく。入院して16週目に行った2回目のインタビューの直前で、その移行に当たり外的な要因となる出来事があった。

その少年院では例年、地域の教育機関や民間協力者の方々を招き施設内で成人式を開催していた。その年のたった一人の対象者であったP君を行事企画担当の教官が個別に呼び、成人式を企画していること、そして少年院からP君の保護者にも参列を依頼する予定であることを伝えたのだが、P君から聞かれたのは、成人式を開催してほしくないとの強い申入れであった。その他の事情も考慮した結果、当日は式典形式ではなく茶話会形式で内輪で新成人を祝う会が催されることになった。職員らから暖かいメッセージをもらい、会場には嬉しそうなP君の姿があった。

当時、成人式の式典を嫌がった理由をはっきりとは言うことのなかったP君であったが、2回目、3回目のインタビューの中でその思いを語っている。これが先ほどの「学歴を恥ずかしく感じる自分」の

受容と次の時期への移行に関連づけられているようである。

小：成人式をあまりやりたくないという話を聞いたんだけど。何かあったの。

P：ここではちょっとやりたくないっていうのがありましたね。

小：少年院の先生たちのイメージでは、成人式社会でやるじゃないですか。外には出してあげられないから埋めてあげたいという。

P：むしろ、そういう気持ちがたぶん全部だと思うんですけど、どうしても、何か。

(中略)

小：年を知られるっていうのが嫌なの？それとも祝われるのが嫌なの？

P：祝われるっていうのは別に。その日の朝に先生から「おめでとう」って言われると嬉しかったんで。（少し考えて）恥ずかしいっていう気持ちが強かったんです。（また少し考えて）なんか、20歳って知られるのが恥ずかしいんじゃないって、20歳になったのにこんなところにいるんだ、とか、成人になってこんなところにいるんだ、みたいな。

小：ああ、少年院。やっぱり「少年」っていうのは違うって感じがあるのかな。

P：違う、違うんじゃないですかねえ。

小：少年院なのに、成人かあ。そういうのって意識したことあります？

P：最近だと、常にしています。 <②5>

20歳になることを成人式場で参列者に知られることに恥ずかしさを感じるというよりは、成人式場で盛大に祝われるほどに、かえって、20歳なのに少年院にいることの恥ずかしさを痛感するのだという。

当時、P君が感じていたとするこの思いは、前章で示した「中卒であることの恥ずかしさ」と同様、誰かに知られることで生じる一般的な感情というよりは、この現状にある自分に対して抱く情けなさや、けれども今更どうしようもないとの無力さであり、本インタビュー全体を通して少しずつ形を変えながらも登場している。

P君のこうした状況や心情を『いたたまれなさ』と表現し、図にしたものが次のとおりである。

20歳の誕生日を迎えた後に行われた3回目のイン

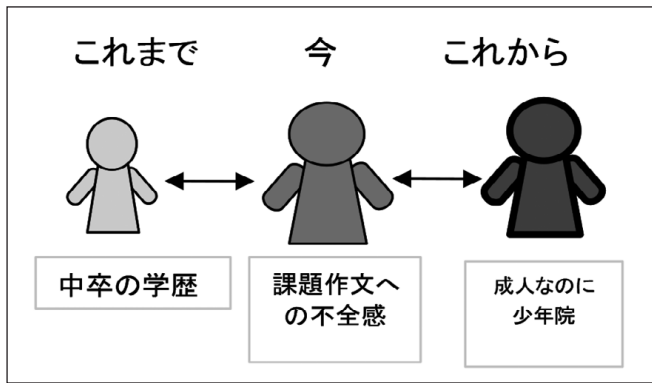


図3 「いたたまれなさ」の構造

インタビューの中で、P君は社会で生活していれば、たばこを買う時などに身分証明書を提示するといった、20歳であることの証明を求められる場面もあるが、少年院ではそういった機会がそもそもないことを例に挙げ、「20歳なんだなあ実感がないのが正直なところなんで(③2)」とも語っている。

『少年院』という名のとおり、少年院での生活において、20歳であることを自覚させる場や機会は、先の成人式といった行事のほかは非常に限られている。P君の抱える「いたたまれなさ」は、少年法の制度では起こりうることであるが⁵⁾、それは保護処分を計画的かつ効果的に行うための制度であって、20歳を迎えたことを理由に他の少年との関わりを断絶したり、特別な処遇を行うようなことはしないのが通例である。

インタビュー全般において、P君が「少年院」に代えて「ここ」や「こういうところ」と語っているのは、自分自身が収容され生活しているこの場を「少年」という言葉を用いて語りたくないとの思いの表れと推測される。

前章において、P君は「今までの自分」に戻ることを断ち、新しい方へ進み出していることが分かった。しかし、その一方で、ここでは前に進もうとすればするほど、「学歴が中卒である」というこれまでの後悔や、「20歳になるのに少年院にいること」という今の状況への無力さをいたたまれなさとして強く感じるようになるP君の姿が見えてきた。

(2) 担任教官に相談する

少年院での生活は他の少年との集団生活を基本とし、「寮」と呼ばれる集団に5、6名ほどの教官が担任として配属される。

P君は当時の思いを担任教官に相談したという。

小：面接では先生に話したの？
 P：はい。
 小：そうだったんだ。いろんな先生に？
 P：3、4人の先生には「こう思っているんですよね。」みたいなことを話したんです。
 小：こういうのってSOSではないよね。
 P：そうですね。「助けて！」っていうよりは、高校行くために勉強教えてとか、自分からしたら、その「恥ずかしい」って思っているのを解決するためにはどういう方法があるんですかっていう…。
 小：質問…
 P：そうです。逆に「なんかいいですか。」みたいな。「『今までの自分でいいや』っていうようなことはないですか」みたいな。

〈①4〉

20歳を目の前にし、また、元の職場での雇用が決まっている状況で、P君は、例えば、少年院でも受験可能である高等学校卒業程度認定試験を受検してみるといった、中学校卒業の学歴を埋め合わせる直接的な手立てを模索するようなことはしない。彼にとって目下の課題なのは、そうした埋め合わせではなく、内面に抱えた「いたたまれなさ」との向き合い方のようなのである。

この語りの箇所では「みたいな」、「っていうことないですか」が多用されており、P君は「今までの自分でいいや」と言いつつも、直後には冗談であるかのようにそれを打ち消している。もうすぐ20歳になるからこそ生じたこの悩みをかわして見せようとするが、実のところその余裕のない、そんな心情がP君の語りには見て取れる。

「普通の日常を過ごしていると、内心思っても考えるようなことはしなかったと思うんですよ。俺はこれでいいんだな、とか、このまんまで俺はいいや、みたいな感じで。(①3)」といったように、普段の社会生活の文脈で読めば、【今までの自分のままでいいや】は、将来への諦めを含意していることが多いが、少年院生活を送る19歳のP君の文脈では、目指す先にある安寧な生活へと意味が反転している。

先に「いたたまれなさ」としてまとめたこうした

思いに対して、少年院で過ごす時間の中でP君が見つけた独特な解決の仕方が表れているのが次の部分である。

小：「悩んだ時期ですよね」って言ってくれていたけど、ちょっと、くぐって、向こう側に言った感じなの？今は。

P：もう、色々あったんですよ。この仕事で貫いていくきっかけは、親が面会に来てくれたことだったり。あとはやっぱり、学歴と学力は違うじゃないですか。

小：はいはい。

P：学力って、算数とかじゃなくて、例えば会社をおこすのであれば法律の勉強とか、難しいこといっぱいあると思うんですよ。その学力を身に付けていけばいいのかなと思うんですよ。

小：学力。

P：自分、通信教育を受けているじゃないですか。あれも学力に入るじゃないですか。見方によっては。知識としての。そういうのを学んでいけば学力とかは別かなって。あとは仕事で色々な資格ととるとか。色々な方法はあ
るなって。

小：そうかあ。

P：「高卒とれるよ、大卒とれるよ。」って」言われれば、「え！」ってなる、そんな気持ちはありますけど、今のまんまで、今の自分にプラスをして、前の自分よりおっきくなる方法
は見つけたんで、だから迷いは少なくなった。
結果的には、今は。 (①5)

寮担任の教官らに「学歴を恥ずかしく感じる自分のこと」を相談し、助言を求めながらP君として行き着いた先が、「学歴は中卒。けれども学力は別」と整理し、学歴にこだわることから離れ、これから先の目的を、学力を伸ばすために知識を身に付けることであった。

「『今までの自分でいいや』っていうようなことはないですか」との現状維持でもよしとする語りから、「今のまんまで、今の自分にプラスをして、前の自分よりおっきくなる方法は見つけた」という語りへの移行には、「今」を折り返し地点として未来に向けて進み出そうとするP君の思いが窺われる。

ここにおいてP君は、気持ちの切り替えによって冒頭に示した日記にある「学歴に匹敵するくらいの自信」を持つことができたようである。

(3) 担任教官に励まされる

「これまでの学歴への恥ずかしさ」が「これからの学力の習得」に切り替わる転機は何だったのだろうか。

これが転機であると断定できるほどのエピソードではないものの、担任教官からの指導全般に対して後ろ向きだった当時から今の心境に至るまでの間には、P君は当時の寮主任であったY教官から言われた一言が大きかったと語る。

当時の後ろ向きだった態度の背景には、少年というには精神的にも大人に近いP君の年齢があったようである。具体的には、担任教官から提出するよう指示された課題作文、それは自己理解を深め、非行についての振り返りを促すためのものなのだが、その課題に取り組むことそのものに対する不甲斐なさや取り組んだ後の不全感が日に日に増してきたのだという。

小：(課題作文に取り組む中で)先生から求められて、実際できなくて悔しかったというようなことはあった？

P：形に出る部分で答えを求められるんじゃないんですよ。ただ、例えば個室で先生と自分の考えについて話したりすると、なんて言うんですかねえ、求められていることが、あっち、あっ、先生が求めていることと自分が提示したことが違うなって、言われたりしたら「いや、こっちだってそれなりにやったのに」みたいなことで。なんて言うんですかね、形に見える答えとかより、何か、100%答えがないものとか、善悪がつけられないものであるとか、答えが一つじゃないものってあると思うんですよ。そういうのをすごく求められているような気がして。なんか、哲学的な部分になると思うんですけど。 (②7)

慌てて訂正するも、当時を思い出しながら語るP君は、自分自身を「こっち」、担任教官を含めた職員を「あっち」と、対立的な言い回しで表現している。そもそも自己理解に終わりはなく、また、非行の

振り返りには無限ループのような構造があるからなのだが⁶⁾、精神的にも成熟しつつあるP君には、担任教官が求めている（とP君が思い込んでいる）ことを

- ①答えがないもの
- ②善悪がつけられないもの
- ③答えが一つじゃないもの

と極限的にとらえ、ある程度考えた上で諦めてしまうこと、安易に受け流すことをせずに、ただ延々と課題に向き合わなければならぬ状況に自らを追い込んでいた。

この状況は、これまで示してきた「学歴が中卒であること」そして「20歳なのに少年院にいること」と同様の「いたたまれなさ」としてインタビュー全体に通底している。

そんな彼の様子を気に留めたのであろうY教官とのやりとりが次に続く。

小：先生がP君に色々やってくることの重たさっていうのが今、重たくなってきたっていうのは何だったのかなって。それは君の中の切り抜け方の何か本質的なところじゃないかって気がするんだけど。

P：きっかけはありましたね。Y先生と話したのはすごいきっかけだったんです。変な言い方ももしれないんですけど、ここまで自分を評価してくれているのかって。

小：そうなんだあ。

P：そういう、話は違うんですけど、違う風な、違うとらえ方をするとそういう風に聞こえてくる話だったんです。

小：何か具体的な話だったの？

P：具体的な話はしなかったんですけど、ただやっぱり、「君ならできるだろ。一歩先を考えられるんだから、求めるよ。」みたいな。そういうことを言ってもらえて。

なんか、自信を持てるようになって。楽になった。なんかそういうの言われなくて、あーだこーだ言われるのがすごい重たかったなって。ある意味先生たちの本音を聞けたなって。

〈②12〉

Y教官からの助言は、職員との間での対立関係、状況との関係にあっては堂々巡りになっていたP君

を渦中から引き上げる出来事となったようである。

特に「話は違うんですけど、違う風な、違うとらえ方をするとそういう風に聞こえてくる話」という独特な言い回しには、前述した「あっち（教官/大人）」と「こっち（P君/（少年）」といった二項対立の状況や、無限ループの中での混沌とした状況から抜け出した、開放的な捉え方が窺われ、その転換は、学歴に代えて学力の習得を目指し「色んな方法はあるなって（①5）」と切り替えたのと類似している。

一見、突き放しているようにも聞こえるY教官の助言がP君の中で冒頭に示した日記にある【学歴に匹敵するくらいの自信】を持つに至る転機となったようである。

Y教官との当時のやり取りを振り返るP君に、改めて少年院で20歳を迎えることについて問いかけたのが次の箇所である。

小：少年院だと少年だもんね。成人になるっていうのは矛盾していると感じるのかなあ。

P：でも、やることはみんなと一緒にでも、もう1ランク上くらいは望まれているんだろうな。

〈②5〉

ここでP君は、Y教官から受けた助言にある「一歩先」にも似た「1ランク上」という表現で、もうすぐ20歳なのに少年院にいる自分自身の複雑な立場を肯定的に表現することができている。

大人に近い年齢で少年院に入院したからこそ抱えることになった「いたたまれなさ」の思いを、少年院に入院したからこそ出会ったY教官からの助言をきっかけとして、解消することができたことが窺われる。

6 これからの自分

(1) 色濃くなる

前章で取り上げた「話は違うんですけど、違う風な、違うとらえ方をするとそういう風に聞こえてくる話（②12）」に示唆された視野の拡がりや、「やることはみんなと一緒にでも、もう1ランク上くらいは望まれているんだろうな（②5）」と担任教官からの期待の引受けといったように、P君は少年院での生活の中で着実な成長を遂げたようである。

出院を1週間後に控えた3回目のインタビューの場で、少年院で生活することの意味について問いかけた筆者に対しP君は次のように応じている。

小：(少年院に入院した) 意味はあったのかなって。きっかけっていうのはあったのかな。
P：入ったこと自体がきっかけだったかもしれないですね。
小：「入ってよかった」って思うことができるようになった時期っていつ頃からなんだろうね。
P：時期っていうよりは、自分の悪いところに気づき始めた時なのかもしれませんね。最初の頃は担任の先生に言われても思わないみたいな、そういうのが心の中であって、そういうのを素直に「確かにそういうのもあるなあ」って思うようになる。たぶんきっかけじゃないように思うんです。徐々に、徐々に生活しているうちに、何かやっているうちになんですよ。(③9)

P君にとって、転機の訪れは具体的なきっかけというよりは「自分の悪いところへの気づき」にあるという。悩んでいた時期から新しい方へ移行する過程において、彼の語る「自分の悪いところへの気づき」は、少年院での生活を通じて「徐々に、徐々に」なされていくという。この「自分の悪いところ」には、少年院に送致される原因になった本件非行はもちろんのこと、これまで述べてきた、少年院生活や担任教官との関わりの中での自分の至らなさへの振り返りがこめられている。そして、これまで取り上げてきた「いたたまれなさ」はその一つとして挙げることができるだろう。

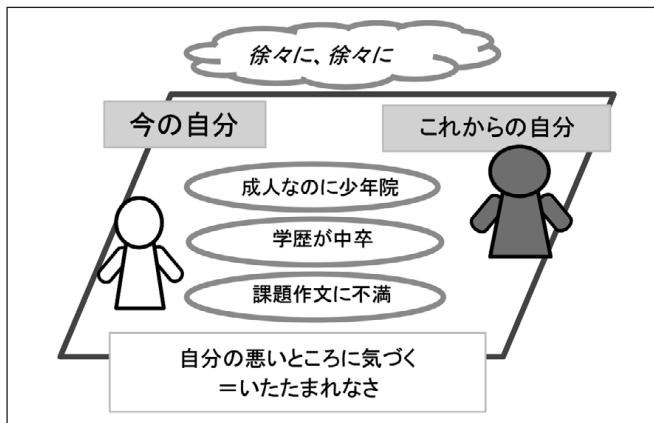


図4 「これからの自分」との関係

また、少年院での生活は社会で送る生活と比べても異なる時間が流れているという。

P：社会にいても今考えているようなことや気づいているようなことにいつかは気づいているのかもしれないですけど。それは絶対時間がかかったと思います。
小：時間。
P：なおかつ、将来の夢とは言わないですけど、こういう生活をしたいとかを実現するためには、絶対、スタート地点から考えて今の方が早く行けるなどというのは、色んなことでこの半年間で遅れた分とかを考えても、絶対理想とするところには早くたどり着くような気がして。そのくらいこの期間は濃いです。
小：そっか、そっか。
P：短いけど、濃いです。社会にいれば濃くはないんです。薄くて。でも、色んなことはできるんで広くはなりますね。でもどっちかっていったら自分の今の理想を実現するためだったら、こっちの方がよかったのかなって思います。(③4)

社会や家族から引き離された少年院での生活は、短期間の少年院でさえも20週間ほどに及ぶ。非行のあった少年たちはその時間を、更生に向けてそれぞれの道を見つけていくことに費やす。そのための時間として20週間を長いとみるか、短いとみるかは様々な見方があるだろうが、施設に収容された分だけ社会で過ごす時間が失われるという現実問題を考えれば、短いと結論づけることができるような時間ではないとみるのが一般的な向きだろう。

にもかかわらず、出院を間近にした当事者であるP君からすれば、少年院で過ごした時間はむしろ「短い」のだという。続けてP君は「濃い」の意味をこう語る。

小：それは目標の方も今の君に近づいてくれたのかなって。
P：近づいたっていうよりは現実化されたってみたい。
小：現実化された。
P：近づいたってなったら、今進んでいるみたいじゃないですか。今、スタート、ここを出て

すらいないんで、スタート地点にも立っていない。そう思ったら色濃くなった。

小：色濃くなった。

P：理想としている生活だとか、こんなことしたいというのが色濃くなった気がします。近づいてはいないんで。 〈③5〉

元の職場での雇用が決まったこと、学歴に代えて学力を身に付けることにしたといったように、少年院にいる中でも出院後の将来設計を着実に具体化してきたP君であったが、本人によれば、少年院に入院中の身で社会生活のスタート地点にすら立てていない現状にあっては、こうなりたいという目標と現在の自分との距離のイメージを「近づいているか、遠ざかっているか」で表現することはできないと語る。そこで、遠近に代えて、今とこれからとのイメージを表現するのにP君が用いたのが「色濃くなった」という濃淡での表現なのであった。

(2) 透明なものが色づく

目標や理想の生活が見えてきたことを「色濃くなった」と表現したことについて、筆者はその言葉に込められた意味を質問する。

小：濃いっていうのは色とか濃度っていう感じ？果汁100パーセントとか、水色が青色になっていく感じとか。

P：(少考して)透明なものが見えるようになったみたい。

今まで、こうしている割には考えていなかったんですよ。こうしたいって言っても、そうするためには何が必要かとか、何をしなくちゃいけないだとか。なんかあったら頼れば

いいや、とか。そんなあほみたいな。

小：いやいやいや。

P：みたいな感じで。その時っていうのは見えないのと一緒ですよ。薄いみたいな。

小：見えていないっていうのはそんな感じ。

P：こうしたいっていう輪郭があるのもしれないんですけど。輪郭はあるけど「あれ？これ何？」みたいな。 〈③5〉

P君はこれまでの自分を「輪郭」や「透明なもの」だったとして、少年院での生活のイメージは、そうした輪郭だけのものや透明なものが次第に色づいていく過程なのだと言ってくれた。

だが、辞書的な意味での「輪郭」はあるものの外形をかたどる線を示すが、「あれ？これ何？」という語りからも分かるように、その輪郭で示そうとするもの自体が、明確にされてはいない。よって、ここで用いられている「輪郭」は語った本人にとっても漠然としたイメージでしかなく、自分自身を価値あるものへけん引するまでの内容は含まれていないようである。

一方、「透明なもの」という言葉は、前述した「目標や理想とする生活の色濃くなった」や、はたまた悩んでいた時期から抜け出すことになった「色々な方法があることへの気づいた」といった、「色づき」の初期段階を意味しており、単なる「輪郭」から一歩進んだ「透明なもの」という言葉には、Y教官がP君に助言した「一歩先」や、他の部分でP君が語った「1ランク上」と同様の、新しい方へと移行する可能性が示唆されているようである。

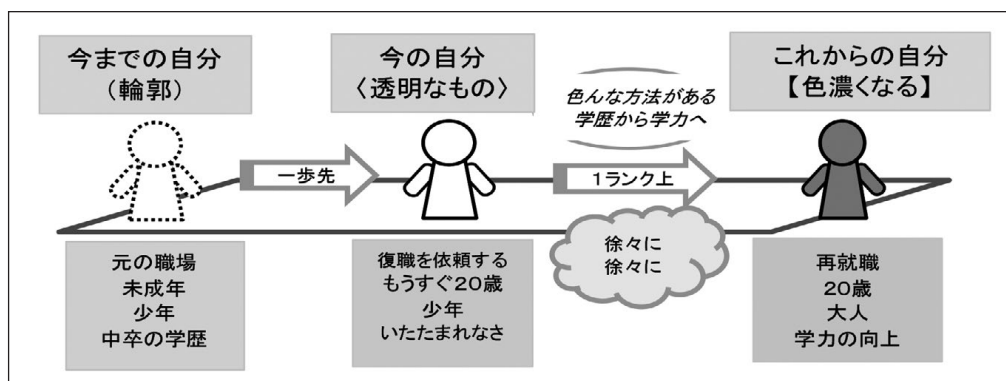


図5 少年院での経験の時間構造

7 総括

本研究では、20歳を間近にして少年院に送致された一人の非行少年が、そこでの生活を通じて、元の職場に再就職する進路を選択し、また、これまでの学歴に固執し思い悩むことから離れ、学力の向上を目指す形での更生の道を見出していく過程を、少年から大人への時間的経過に沿いながら明らかにしてきた。

時には企画していた成人式を拒絶したり、また、担任教官から出された課題に対し不満を抱く時期もあったが、担任教官らに自身の思いを相談し、中でもY教官から励ましに触発されながら、成長と更生の道のりを歩んできたP君の少年院生活は、周囲から見えるよりも平たんなものではなかったようである。

P君は、これまでの自分を「輪郭」、そして20歳を間近にして目標を見据えることができるようになった一方で、少年院に在院中であるがゆえに社会生活へのスタートラインに立てていない、そんな今の自分を「透明なもの」、さらにその先にある理想や目標に向かうことを「色濃くなる」と表現してくれた。

この表現は、少年から大人に移行する今を少年院で生活する人たちの生きられた経験の本質のある一つの側面を照らし出したものと言える。

注

- 1 法務省ホームページ上の「『若年者に対する刑事法制の在り方に関する勉強会』取りまとめ報告書」(<http://www.moj.go.jp/con-tent/001210649.pdf>) 第1の1を参照。
- 2 田中(2013)によると、2009年11月から12月の間に、47の少年院の入院者を対象とした大規模な質問紙調査を行った。在院期間の中間期と出院時期に二度行われた質問紙調査の結果、「現在の少年院の先生」は、出院時期にかけて信頼感のある他者として上昇し、また、自己表現に関する項目のうち「自分の思いどおりにならないと、かっとする」という感情は新入時期から維持されるものの、「かっとなると言葉づかいが乱暴になる」、「みんなの前に出て話をするのは楽しいと思う」の項目は大きく改善されるという。
- 3 マックス・ヴァン＝マーネン(2011), 59頁

4 当然のことであるが、中学卒の学歴そのものを恥ずべきものであるとの趣旨ではなく、P君にとっての意味づけを述べている点に留意すべきである。

5 少年院法第137条では、少年院の長は、少年(法令上が「保護処分在院者」という。)が在院中に20歳に達する場合には退院させなければならないが、保護処分決定から1年間を経過していない場合には、1年間に限り収容を継続することができるとしている。

これを「収容継続制度」といい、事実上、保護処分決定があった後、20歳を迎えた者についても少年院での保護処分の執行は想定されてはいる。

6 遠藤(2014)は、非行の反省をしようすればするほどに、その足りなさに気づき反省を繰り返さざるをえない状況を「無限ループ」構造として説明している。

文献一覧

- 田中奈緒子ほか2013「質問紙調査からみた少年院」『少年院教育はどのように行われているか』矯正協会
- 津田雅也2016「わが国における少年の刑事処分の位置付けに関する議論—少年年齢の引き下げの是非をめぐる議論を契機として—」『罪と罰』日本刑事政策研究会 平成28年12月第54巻1号
- 遠藤野ゆり、大塚類2014『あたりまえを疑え！臨床教育学入門』新曜社
- マックス・ヴァン＝マーネン. 2011『生きられた経験の探究』(村井尚子訳) ゆみる社
- ダレン・ラングドリッジ. 2016『現象学的心理学への招待』(田中彰吾ほか訳) 新曜社